853
207

唾雑史

利

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207

ガラス使用

853-207

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207

ガラス使用

唾雑史　巻之五

尾陽　秦鼎著

一伊勢國志郡矢野村に
伊弉冉尊を紀列　粟鳴の神を風
名高名比神を海
井氏修造勅額を天津雅女雅
日奥神を鈴明天皇北村
以下略しく按津島池田長狭比売を十握（タマ）志
咩流一可奥國須佐の地
大日本中大伴

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

の文字は尾張の女書良媛益と比列
し酬ひくこそひ文をまひらう大矢と沙の玉さ
しきく後の契を約せしより書良刕矢野の名
始まるこゝ書せう又延喜の神名式不得定
神社を記せる秀良刕の社かゝる次の清まの天照大神の心もてなくて雅日
異号と天照大神の妹とあまひふみ人附会
此後となりや矢野をも音もまゝ
玉葉集
樟ちもちまし
矢野こ神よ

一四所神叙

尾張國熱田宮（草薙劍）

大和國布留宮（斎見劍）

八坂瓊曲玉をいふ事ハ舊事紀ニ神武天皇紀ニ見ゆ

朝廷（所寶劍）

說ある事ハ舊事紀ニ見ゆ

備前國石上宮（蛇ノ麁正劍）

宗像社傳ニ八坂瓊曲玉ハ

のむと心ふくる義ニ神寶ともいふ

又ハ鏡の偽あり

一伴部集ふ吸ふる人を從し酒肴を贈るとさ

のむことゝ云古流のもの

ゑとゝいふを非とせり

珍寶社ハ

限ル次ニ字治山田の神人ハ集宮をいふ

是も從ふなるもの

言の但附會せる

賞ハ二字をサカホカヒと讀ハ誤の

次ニ新宮なる熊野人ハ

事ニ又從ふ食物と設るをいふ

の一字勢強なるへし

昌泰梅ホガヒハホキヲ延タルヲ云ニテサカホカヒハ酒祝酒ノ意ナリ

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207

ガラス使用

うくいつまでのまうくもいまうて雖なるべくしく
て一琴あべくし古記を引き名集語の例
拘むのひのるえそう

一我名神社の清三神を称するも
清歌を請くることふ但し是も
其神を以て祀ある神第を以て
其神のよう所存をくく宗一のみ釋氏う佛菩薩の
三摩耶といくく安芸也一社もあるまた社

五輪形 大日
鉢 釈迦相成 道三形
寶鐸 胎藏界 釈迦
蓮華 弥陀
未敷蓮花 観音
羯磨 金剛界 釈迦
寶幡 地蔵

此外祝宮ら矢等種くの祝あり
是を不負しく佛像一ありも階造ふう宮也る神
祇へも物するもあり大治二年十二月廣雪雅明大僧
姫世記要書一大小神祇神代の神宣をもつく而
もあるよう多一年を歳を変化の矢邦と神祇をし雪一真
清浄の徳を祝ふうるも我名上世の風俗のやし但
一十五も又杉松くくも三摩耶祝の説一をく待る
まや力の大神宮八咫鏡と
け真鏡と皇孫るう授ももの
とんるのやしくくう勅言あまうくや未代まくなのく

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

皇天神の清のまにまに天降りまし給ひ
神帝の清時ように和平神宮と建給ふ草薙剣を
日本武尊東征還清の舟尾張の宮簸姫の家に殊し
後のかたみとなし給ひぬ（カミツカリノミヤ）草薙後社と建
く武尊の清心朝ろくに幸給ひ
徳を表ふく神となせりまあく上古質素の人情と
ろづし或秘記に天児屋根命はこちら降し大玉
命は剣と生まつる（是両宮清殿のうち本宮遷座
都命は当社なり）
是ら尤の御剣を右の御手に
執ふく上代質素の風と
家と而ふく巧まずあく欲なく根命賢来
ともふく和魂の表せし是も根ま尊拘ふく読
未詳玉ふなと榊まか事ふ夫榊は一時のその為拘
は長く為ふく祖母ふ帝ふゆへおのつふ真社の
清殿ふふふく読玉杯と事ふ清社と多ふそゆ
一庵小中翁新熱田宮北荒地村ふ三嶋明神社
あり中比荒廃ふく清心朝ふと古田ふ
遥年祢保ふの天授海地ふ住ふく其祖と宮せふ古俗古ふ
鷺と白鳥と呼ふく一村男女食せ次夫日本武尊白
鳥と化ふ給ふと西東ふ人ふ
古事まあくやと問人多ふ帝曰尾張熱田縁山俗名
白雪の鷺ふふ故あふ
又大和本草記 武尊白

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

鳥ゐる山也 鷲ノ山と鷲坂山と
ふもと山城の国一ノ宮也 第葉集に志賀鳥の鷲
坂山のふもと八九の宮あり 仕等注すべき
一尾列津鷲の社 多田満仲 神事あるべし 一社の
秘そせり 和列 三輪の社なり 是も似る事侍る
木集葉昌の歌
東ゆく志賀の浜風
こゝ鷲のやしろの志るし風
芦と栗る鷲ものく津鷲と鷲神とまつれる社ゆへ
六月祓まつり疫の神夏と和栗芦 北鷲とあるも
のふもと是と多く流れ 流行の疫気とふ
ものなり
一辻社津ま社なんともあるハ叢祠なるの 信貴社ふ
道北辺の表下蔭の辻辺ろ
たゝのなるさうの
出明北らし
草深ま 聖市北表の津ま社
もゝ花すゝき 聖市北表の名ゐつる神
一台記曰或古記曰平安城ゑゝ東右嚴神西御猛霊
神嚴神者賀茂大神宮也猛霊者松尾霊社是也

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

依二神之鎮護期一万代之平安云々

抑今日賀茂臨時祭事

歴代編年集成曰延暦十三年癸酉正月十五日始
定造平安城日本後記曰延暦十二年三月庚寅令
五位以上及諸司主典以上進候夫策新京城
明月記曰建永元年八月廿一日今日称御霊右近
祭上辺雑々人日来結構去十八日式日依仰延引
今日可渡御桟敷云々施種々風情注日各稟渡
桜神輿を始て称の風流を施すと云々

称頭冠服を令着供奉人を
を那し又を故事とするものなんどの
義共多く此事あり疫を送を洛
其多を称又称
清和帝貞観のち免神泉苑の法会多
三代実録貞観五年五月廿日法会ふ
牛頭天皇多の按摩二代実録ニ我国
毎年疫神祭修法事
ると多く若干し多備列事多天皇を多る
此多ふ法会を按摩略記ると此

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

次清戸幸神ます　是出雲路の座祖の今幸神町
又上下社出雲寺下ある所の清戸を云ふなり
七天下疫病流行ます　祈ら受ける事ありし一般の
祈ら受ける事上の清戸ます　又出雲ます
清戸堂下社清戸ますと　下出雲ますの事なりと云
又出雲ます　傳教大師の所建ますと比叡山
以ます寺ら　延暦四年ら　記せる出雲ます御記
ますますら　下出雲ます　出雲北前司成秀建立
ますら　右ます古今集の歌ますも　出雲ますと
の称歌ら出ます　枕詞ら出雲路ます

地名なら出雲ますと素戔嗚尊ます　出
雲の名ますますと素戔嗚尊ますと云ふ事ありて
延長の風土記ら　牛頭天王ます　素戔嗚尊ますと
云ふ説ます　貞観十八年感神院の清戸ます　牛
頭天皇ます義ますと　素戔嗚尊ますと　牛
下部ます出ますら　まする事ますや　実まする事ますや　疑ふ
ます

一下野國二荒山宇津宮ます　別ます
ます　狩人ます頭ます　借ます
信州諏訪ます大神ます　ます

康と事のまとなのうしもたる元朝の供物まを
庶務を掌どりもつぱら江家次第をそうそう

一熟田祠宮畧記

千秋 大宮司　古尾張氏補之季範以来
馬場 權宮司　南藤氏十引　補惣撿挍
田嶌 權宮司　補祭主称祝師
土良九 大内人（オホウチト）　權宮司依年老亙上座　尾張庶流卜云
守部氏　三

右稱神宮大喜氏一家亦神宮也但大喜氏
八劍宮奉祀之家云々
大喜氏尾張宿称之庶流二家也今一家斷

絶

撿挍　中臈九座各一年老補之
別當　中臈左座各一年老補之
權内人　中臈右座各一年老補之

右稱三老
衣冠十人中臈九右座各五人三老次年老
補之
閑闇一人
所司二人
中臈之内撰真人補之

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

一番頭　俗云組頭　祝師代官　林氏
二番頭　惣検挍代官　栗田氏
三番頭　大内人代官　長岡氏
右称三代官
御前役　栗田真人
神官列坐之日薦敷等真他神役多
郷役　栗田真人
祠官列座之時供倍膳等儀數多
厨家　栗田真人
右同上

両師　大原氏　長罡氏
司神饌器調進菓子役也
御供師　長罡氏三人
調進神供役也　林氏礒部氏同三人
樂人　中臈家自古有其家
右中臈之内自古定其家
長役　俗云長大夫
祝部一ノ長老
神厩司　俗云御馬屋別當也
祝部座　十艸大夫
惣市　自祝部座出之
神樂市　自神子座出之

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

燒夫　二人
雁候　一人
猿樂　官福
凡中髆上官八十餘家
林栗田大原礒部長岡
八劍宮（下官）　祠官
神宮　大喜氏
代官番頭　大喜氏（主殿頭）　代官　松岡氏
大喜右京　代官　鏡味氏
右猶兩代官

御前役　大原真人
師役　若山氏
御供師　長岡氏
此外畧
凡中老下官五十餘家
大原松岡鏡味若山
祝師座土師姓菊田右數家其中家松
著一家（但同姓）　神主座鏡味氏
高倉宮　祠官　松岡大原礒部
知我麻宮（俗云源大夫）　祠官　礒部大原鏡味

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』　請求記号 853-207
ガラス使用

日破宮　祠官　若山大原
水上宮　祠官　久米氏

豊原秀次の三男として生まれ文禄四年秀次自害の後松
雲と称し田舎に隠棲仲安秀次の子孫あり近
村に住し代々の領主と親しく（俗に百年文の祝という）真蹟を
おさせり仲定天正八年より寛永四年まで四年
祀り勤仕せり。の男なくして家系たえなんとす我
敬公命ぜられ熱海投仲迎えて二男馬場を嗣家
のる仲秀と改む。田舎家を継ぎ改称す。（今按に内記寛永七年まで仕えたり）是をもって田
波守に任ぜしめ
舎家より馬場家に庶流の如し。但し古くより田舎家

より馬場家をお継ぎせりの今の当家を相続す田舎
の仲和と称し時呼神代より一姓の
系譜なり一代も他姓を入れず一子相伝にて家を継ぐなり家
もなくして、世系を伝えず田舎家と永仁
七年諏訪古文書に尾張氏系図一巻を納めり今
また云う仁上内蔵頭仲頼宗家譜を云一系図一通
を記せり年号清写原故真大系と記すと云
熱田上宮東門北額を山鳥の筆と真額に
田舎家に納む。破門の大字つまりて天保
喜時代の編者清敬書宣旨北之定諸系北後裔

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

殊に依、彼是あり、二月十一日階前より外
詩歌北數首くいろふきもの、清う十吉歌
次に外つくのかる田祀信る
戸をかくるを次そもそも戸ハ神みつ我国のみ神
湯後北る吏うへそもそも真とかくこまもせし
尾両大名男神 五月二の共神華ハ三皇男子
くとう次実う古風へ又熱田のこの清戸古の秘
定ハ熱田尾張の宮称北
清両脇なる
一熱田大宮両殿古用殿北男あり田祀と拝まるう

古用殿の宮北 清用清殿と宮清
と安宮せし神饌と供まる神殿のまよう
草薙の神剣あめまこせ
川維足学世う廣う後宝庫と古用殿を
称し古用北文字まつまく古金の事と附等し秘
伝まく〳〵る尾張氏の家伝う等く油清まき
事ハ大殿と古用清殿と
記うえそう
一熱田大宮司季範彰信以来為氏お清く補之
北うう従五位上加賀守季範男るなの宮う

卜部兼永此二男とす。兼永は是紀伊守季通が
云或説は少納言宗比部輔の守
清範の兼永三男とも云ふ前勅施 今大宮の司職を補すと
為原と称すること卜部氏なり

梅松云 季通の爲代々大宮の司職を補すと

いつも或は戦場を損死し又は罪を一配ふ
なんどもして命を全ふせ世次神慮を叶ふ感を
あるべき歟 中千秋四郎の母を平信長公
此生女比乳母なりしが 大変の際他へ去りて
而領を知し四郎季通の恵別腹此兄九郎季香
重ねて家督とあるべきの信長公九郎の大

宮の職を解き追出さるゝ附家僕の旧記多
く散亡せりとや四郎の母死しかば後彼領地
と国永又悲嘆私に領得せりとぞ傳へ
あるとや

梅松云 信長の妾熟田中瀬村の者妻女
次彼妾種姓を尋ねしかば国永氏の女
信長卒去の後国永氏と熟田社司を
せり 妾大変なり 嘉永云 罪人(クラカケ)傳十郎あるべく候所
の地二十余町を国永へ賜りしより十
秋四郎の母を彼卒去の後生る女の乳

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

女なり

一勝速日尊 ― 天照大神御子

高天原誕生

天香語山命 ― 尾張宿称等祖 ― 支流甚多
母天道日女命 ― 文徳之臣

宇麻志麻治命 ― 物部連等ノ祖支流甚多
母御炊屋姫命 ― 武徳之臣

此両神ハ神武天皇東征の舟大功ありましさ
もつて二流共ニ永く絶ず代々繁昌仕まつ
りつる

香語山命ハ高天原より直ちに此国へ天降ひて
主業を定命ゆゑ高倉下命ともいふ称せり多クハ
書役ヒコハ男子共男称ニハ大人の略ニて長老共
称呼なるゆゑ二名を同しく高倉下命ともいふ
ハ香語山をいふなり

饒速日尊神孺ましまして
歓娯つゝ豊葦原より
教ありつゝ真服等の神
白庭村ニ葬ル勲功ニ
海也日本武尊の薨去所ニ
此歟之我

古えの風俗をうるへまこうる我
一神武帝 即位の初天富命 諸の斎部をもき
のみくに三種の神寿を 正殿 もつ更 きもうしふ宮の
初し 天種子命 紀氏の系 神代の故事 と奏し給ふ
行政を執給ふ 招縁の接遇宇麻志麻治命
内の事 と奉らく 宗廟 と聖風 威儀 と我 なる
ひろき 海也 遠国の起 道臣命 未開 と帥ひ
扶 け常し 宮門 と守 もの
をき 我 百官 序 神祇官 太政官 是
より八省諸司 の職 あるき 政事 のころ

きの為し 六衛 の事き 他 もの
定 たる事 とそうる
一諸社の神官称呼久し 東鑑 に諸社 神官神人 日本後記大同二
年條下曰或右 仕神長事幸 遍例 其有官符 任神
長者宣 改為神主 上云々
式 なる 小神長 を神 と 動し
ふ 仕奉一の称号 と 長官 をよふを
昔の神長 也 遠 もの
但し長官次 官 カミスケ をつき一神宮 とかき
共意 なく長官 を称 するも

一尾張津萬四家七名字委会紙

一番津萬　堀田文五郎

委会　野村文蔵

人数三千余之出夫共ニ

守山大永寺　大問　根井　細葉　瀬戸川

高津

右八ケ村ニ而三千五百四拾三名余出ル

津萬勢之外

二番津萬　大勝長吉

委会　龍集第義

河林之助　光賀善蔵

表海野助

人数二千七百余之出夫

平萬　依庭　三栗　上条良　野庭　依野　一色

時鳴　大山寺　下府　雫栖

右十一ケ村ニ而五千三百五十九名余出ル

津萬勢之外

三番津萬　織田勢助

組会　中根武中　三河荒

右一組

勝部平蔵

笹栗三郎助

吉野大蔵

林宗兵衛　美濃荒

岡本源助

大橋清兵衛

平野友栄

山川儀兵衛

河村久四郎

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207

ガラス使用

右一組

人數四千八百五十三人、

元亀三年申

或古記ニ曰ク、ソノ後ニ信玄ノ又推シテ納ムル処ノ中世ノ集団人軍事ヲ以テ組合ヲ為シテ大根右ノ如ク五ヶ土ヲ著ケ合セテ所民ノ男性ナルモノヲ悉ク書シ人数幾ト雖モ記セシ

一尾張国ヲ天香語山命ノ裔国造ヲ為ル本社ノ神社多シ

尾張国造　小止與命（尾張氏祖千竈ノ神社ヲ祭ル）

三河国造　知波夜命　物部氏

遠江国造　市波美命　物部氏

駿河国造　片堅石命　物部氏

尾張氏ヨリ物部氏ニ改メシモノ多シ

遠江ノ命ヲ以テ尾張三河ニ来リ本社ノ神ヲ祭ル者ノ国造ノ支流ナリ

一尾西海渡北里ニ住ス、牛頭天皇社ヲ建立ス、智積大師北陸ヲ巡ルニ及ビ、由来久シク衰神社ヲ起ス

文治北進爾遠流北增階ニ位
以来ニ至ル言孫ニ代ノ風流ノ船ヲ
ト湾海セラレ世ニ以テ知ラレタリ
一熱田宮海藏門内ニ大石北燈籠アリ寛永中徳
久ク大破ニ及ビ遂ニ寛永十六年四月大地震ニ際
倒セリ方ニ願ヒ北志ニシテ
宮ニ神領金五十余両ヲ寄附シテ
初ヲ添ヘ以テ修ノ成功ノ暮ルヲ俟テ
海ニ本氏ニ清次天正ノ末武勇北名アリ
江別川迄ニ七ノ名ヲ領セラレ錦衣ノ
関東北陣ニ神君ニ忠アリシヲ
千石ヲ加ヘ賜ル従五位下大膳
ノ役ニ竹田永翁ヲ付ケ満蔵
泥江別高嶋ニ一万八
ある時海面ノ遠キニ艶風アリ
ルノマヽニ従ヒ大石ノ燈籠
ト造進セラレシヲ彼家系ヲ人ニ寄与シ
かく書ニ及ヒ
一ニ色禁法ヲ初官等北事ニ
北変ナル刑ヲ科セラル一条豈庶人ノ事ナラ

一禁省年中行事秘抄云毎年
六月晦日神祓祓非禊謂
之忌火玉葉云神事のみ
一木船神と云ふ龍と云ふ志賀
大殿参詣の時汐尻船命と
白久尻船久々遅と是亦異名
也俗語

尾陽　秦鼎著

一紫女姫は右近衛少将業治朝臣
一人あり梅まるゝ是姫は治朝
北松彰田源氏を少敵賢き村上源氏ゝゝ
義田彰田義範云ふあり嫡子二
男也因て家督彰田義範の四也と姫は義範
幼き時より大河内親しく
遠ひ依義勝の女雅俊初貞享
比小倉北原流
嫁し其孫姫は先

侍従教房乃ひ為義賢と生る教賢為家
北称号と雷ゝく 頼房の中
頼房ハ清和村上毎流の源氏あり其書目を云
へき事なく

頼房
櫛中納言勢刕星合城主
├ 昊種
│ 参議従四位下
│ ├ 教房 侍従永録五年七月十五日辛
│ │ 卯堀江左エ門佐義勝ノ女
│ └ 教賢 次将慶長十四年四月十四日
│ 辛卯同教房
└ 昊志 右中将勢刕田丸城主

一ノ源宗綱 下間 備前守
源三位頼政裔
├ 宗仲 左エ門尉
│ ├ 宗章 左エ門尉
│ └ 顕綱 右京亮
└ 下間右馬ノ尉宗章建保七年北狄氏族北狄ゝ捕
えゝを京師ゝく地ゝを賜ゝ上人命
ゝ清ゝ半ゝ蓮位ゝ称せ一其ゝ下間系ゝ
以来本願寺顧ゝ家人ゝ代ゝ下間ゝ称ゝ被
ゝ重久ゝゝゝ江刕勢田ゝ住ゝ故ゝ
濃玉ゝ襲ゝ山田庄ゝ板村ゝ移ゝ山田久ゝ高ゝ

秋次後三河玉滝美那大津村ニ居を移し、秀板
九兵衛と称し秋次と列し義元の麾下に属し同国桶狭
戦死後法名宗林と号す

秀板九兵衛重久 ― 秀板八郎左衛門尉成元 ― 秀板九兵衛元正 ― 秀板主膳 ― 秀板主膳

一芸長十八年十二月二日ニ出生
原有人名ハ馬場 称大久保忠隣 守称 ハ本多上野介正信 ハ従三位中務大輔 ハ井伊直政 ハ榊原康政 ハ酒井忠次 ハ本多作左衛門重次 ハ本多平八郎忠勝 ハ鳥居元忠 ハ内藤信成 ハ松平周防守康重 ハ松平伊豆守信綱 ハ阿部豊後守忠秋 ハ阿部対馬守忠吉 ハ土井大炊頭利勝 ハ酒井雅楽頭忠世 ハ青山伯耆守忠俊 ハ内藤左京亮清次 ハ水野監物忠分 ハ水野下野守忠善 ハ水野和泉守忠直 ハ水野日向守忠元 ハ水野淡路守忠清 ハ水野出羽守忠央 ハ水野隼人正忠辰 ハ水野備後守忠邦 ハ水野越前守忠邦 ハ水野和泉守忠精 ハ水野壱岐守忠幸 ハ水野監物忠武 ハ水野監物忠実 ハ水野監物忠弘 ハ水野監物忠寛 ハ水野監物忠精 ハ水野監物忠順 ハ水野監物忠誠 ハ水野監物忠幹 ハ水野監物忠敬 ハ水野監物忠明

まあ後々まで真後で大久保忠隣改めて中納
言様君忠公殿下一足任の儀事は勿論真の実賢
寛仁にて人君の器量君子勝る清廉やある
へき乱大平世あるの時深剛の気質用ゆき故を
もて人々行下ることあまた同じく中納言様儲君定
リかたき三河守殿も清廉不妨のゆへ時々入えき
せ給ひける利口まし諸侯と謀事を
忠隣の議実に衆人同じく中納言様儲君定
もる人々行下ることあまた同じく

つき十五年僕大権と協力忠誠あるに未だ
事と僕一生涯終るまで一日も忘れざるは我私情を
明らかにするにあり小生好嫌甚だ強く
多くの人と交ること能わず生涯交際
人へ安房下野守宛曰く我命甚だ
の言笑一理あるに当り退くを潔しとす
し我ことをもって退く天野曰僕齢
ことあるに一刀をふるい艱難をわ
足下此局前を如何せんや一言を
つく数日をへて幸是を
治安をもって権下を論し
なん人の言るものなく
私欲をまもらず自ら私
次天路をふみ若
ん候ます
一府下東照宮神輿
永七年仁廟の議し
と満ち祝き騎馬
大権奉行命を
つく十二人

八年八月父子双共に海底に
事　慶長三年四月病死
門跡なり

一海底秘策を濃州北武人等に
伝ふ一巻あり　職金の入る
汲真一　小刀をもつて山王
と彫刻　真如堂高野
将軍てらに
羽をもつて目黒警護
一厩餓死　年記ニ

海底又云書事項の世系を伝
黄金書密書を龍馬に義
又十八代の海底岩陸前
信長卒去以後
しる一又云書事項を
一修寛修都清盛死
一伝七ヶ条林佐渡守信勝
されば南部侯馬を義
信長清事の後人の
かゝる人多し

一源義家朝臣奏事之間、貞季申云、此
甲冑ヲ作ル之時、筥崎宮ニ籠テ、
或夜ノ夢ニ大臣ノ裏装束ヲ着神功皇后ト
甲冑ヲ作ルヨシヲ
授ケテ、義家ニ之ヲ被ケレバ、是大
吉甲冑ヲ製シテ、源氏累代ノ
私ノ宝ト成ル、又一説ニハ、源
家累代ノ甲冑ヲ以テ、春田ノ地ニ
埋ミ、以後ノ甲冑ヲ作ルヨシ、春田ヲ開化ス、

豊臣治爵大閤ノ地ヲ領シ給フ、
連歌ヲ張行アリ、是ヲ以テ、春田ノ先祖甲
冑ヲ得ノ記ニ、治田氏家牒ヲ以テ、
有ノ儘ニ可献ヨシ、
一豊臣秀吉遺言ニ、新八幡ヲ
勧請ナシ、依テ四所ノ神号ヲ授ケ、豊国
大明神ト号シ奉ル、其社ヲ東山ニ建ツ、見伊達軍記
伊達實九之子伊達安房守藤原成實所
述伊達軍記ニ見タリ、軍記三巻自天正十二年十月至慶長二年十月
諸家記録此説未見、秀吉遺言尤可有若

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

事也

一平清盛改秀死後とおもひちかく先一刀をゝしかく後信長の造(ツク)りかく出(イダ)さるゝ事あるまじきとそ其命と救ん潮とのもの改秀公の非を改る意あるとそんかく収ひかへ集かくせて後又一刀と書かく死せしかく改秀寺と縁記る。まゝかく記せり

一清和天皇貞観年中より延喜年中迄の事ハ五位下大義郎臣一所写しかく古今月次の神食大略をかくいまかく祖宗を此流の内秀喜

云々

一神しまかくす帯を初穂と田稲みのかく収めまつる先年の神を初穂と呼ひ今年狼藉の泉貨をそなふる時を是を准しかく志の厚やうにかく

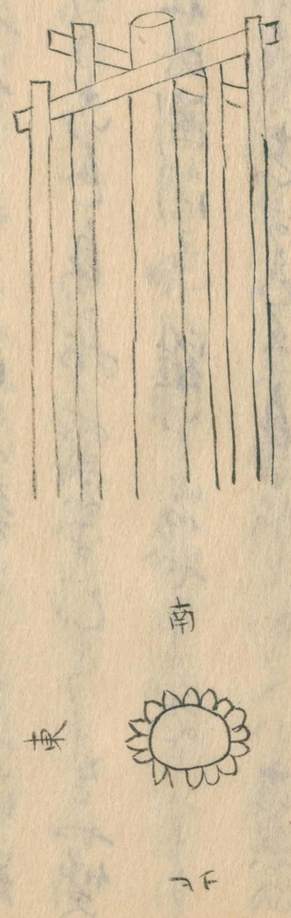
栢まるかく二代実録十二年新銭を鋳そなへ迎(ムカ)神社かく遣せしまし先の所鋳銭と早穂二十文とあるまゝかく

一或問仏教二所大神宮造替ハ神秘なるへきやいの、曰元神文は清浄無為容易

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

ま云事ー悼多し但清松紀を掲まるー大田命
初く造遷ひ〻ー云ゆ豊ま天降本記ー四徳天五
引地の家ま〻く経四丈長き五八五縁ひ縁とゐ
〻まま八重柵ま〻く飾ま〻ー一名忌柱又ま
清松或ま天清量松等の名あり二所神ま〻の建門
天諸社ま多ま〻清松生ー〻事或ハ地
上ま八〻但横石無故あま〻ー清松紀まへ〻
又ひ方傳ま用ま祝宮家ー〻ひ地蔚
法謝奥等等ま清松紀ー又ゆ大ま清濁家
ひ地法なる〻ま家宮掟の地法生ま〻ま建ま垂

とうみ五縁ひ縁とまま〻し五数の鰹ま事等ま
命あま傳来の古法ま神宮
リ又宮家ひ引事ま用ひ
清松図ー式の為ま原あ
ま〻ま



一神社ひ鳥居ま〻ー門ま〻ま〻ま〻ま
伊勢神宮ひ社ま式等ひ社ま居ま〻ー社門ま二ひ門

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

古き書にこそ侍れ仍宝亀二年社司改定符内
外の鳥毛なきあれば門をもいさゝか立ざる者
は返の時張ると志の至て厚き国湯離処よ東門鶏
棲来るあり古老ひろく伝へ
ず神社の御門ゝ雑と名せしよう
鶏棲此名あるや志の至て鳥毛をかくい古志の
称すつきく天の字義もし又名所附会
筆表を書張るなる筆表を門ゝ有る処の神社
古俗の門ゝを可し称ゝ此理説とまゝけおく
ふのくゝゝ迫也

一山蛭ヨ於米ゝ綺(カバシ)日本紀ゝ綺田村ゝ書中右記ゝ加波多
ゝの称半せゝ又ゝ紙幡(宇治拾遺物語ゝ)ゝ義記しゝある是ゝ蟹
幡ゝゝかゝゝ蟹海ゝの
故事ゝ處女ゝ蛇のゝゝんゝ蟹来ゝて蛇
ゝ殺せゝ物語著聞集ゝ昔物語ゝ義次
梅するゝ是素盞烏尊ゝ蛇ゝ斬ゝ稲田姫ゝ称ゝ
ゝゝゝ故事ゝ称ゝ波也事ゝ
なるべし綺田村ゝ神延喜式ゝ綺原座連伊那
太比賣神ゝ称せるゝ
一同郡祇園神ゝゝ同しくゝゝ物語ゝ日本紀ゝ

羽根苑之記　神祇或云祇園社云　和歌
松竹梅云々　今按の表の内　祇園社を村と里俗
称風の神事
引松の村と呼ならん　俗に風と名の一所二字共訓
風と書るといふのみ

一按列艸原郡奥清水里　古俗祇園社神社
海次浦影社の東南　山高清
水書るといふのみ　奥清水村
訓お似て　模なりて　修へたるなるへし
恵神天皇北浦に　立百船と
ゑまつり　真船を武庫の
日本記　真姫船の
といふのみ　古を存松原と
なるへし　松原を大
里も　なるへし　東北
聚落　松原
松竹梅湯
云々　風
俗に　浦影村の
と　里の東
一中原按文　俗吹

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

仲哀 記云 日本紀 云 萬葉集 多し 伊笛吹
伊渡(イワタシ)伊行(イユキ)伊寝(イヌル)
特牛 二神の 仕え 歌云 神 生せし 神 頼 耶 藝 頼 耶 芸 あり
是を 以て 神 系圖 連 秋津日
の 耶 云 耶 雅 き 云 耶 字 此 書 寄 雅 此 男 し 女 と 云 事 歟 昔 人 の 湯 を 浴 ん
遍 の 伊 特 を 吉 集(サ) せ 古 く 此 なき
と 男 女 の 老 此 の 私 く 天照大神
と 私 す 事 い さ も あ ら ん く し 神代巻 に 二

神 と 女 男 か 女 の 法 あ る
と い ふ の 事 を 伝 る 神書 に
一 我 帝 祖 瓊 杵 尊 降 臨 此 處 を 日 向 襲
之 高千穂 峯 と 云 此 山 嶋 山 と 延 喜 神 名
式 に 日向 四 諸 縣 郡 高 の 神 社 と 云 薩
摩 国 薩 記 高 淹 と 云 此 不 二 里 余 東 小 海 を
の 字 山 と 毎 に 登 山 の 者 多 し 神代 此 故 実 と 云 登 山
此 人 く 稲 穂 を 手 に 云 と 云 事 是 と 云 お 拂 ふ
所 と 云 此 山 里 毎 に 大 風 の 吹 ん 事 を 真 の 多 し 大 風 の 吹
一 時 嘆 と 云 し く 天 狗 と 云 事 所 に 云 す 事

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

…ぬきまかせてうく他事と…
…とうの…故…
…ひまし…
山頂と…
あり…
拝…
…
ひ…
…
とうく…

方三間斗…鳥居…
…
一…

洋…

図…
神…

一 多賀大社 同高宮 同敏満寺 同犬上 同
事なり
若山 美天皇ろろく
則尚村大社 鶏田鎮守 門内所宗 孫春満子
大名神と称す 称春宮 延
享保五年 壬辰二月十一日軍を入 林皆悉焼亡
若宮二所 牛伏天皇等社 神社及焼亡上也 梅是
中島郡 勝幡 津島 織田弾正忠平信秀攻那古野
城主今川氏豊 敗落時
一 海西郡 津島牛伏天皇社 弥高屋敷
あり 此社神象此後 此社を弥経地 命ろく 屋敷
里俗古の地主此神ろく 牛伏ろく
私按 梅田氏系譜 津島鴻住人 梅田弥高
記云 養蚊性記 武内大臣 大将大高平
此 真清の夏 まで 御せし 其初と 建し 等号
月日まで 伝ふさう 真清 弥高将
軍家の時 津島の地 地主社
也 伝るゆえ 地主社神 云ふるなるべし 弥経地
の名 古世 弥高 弥高とイヤツ
ヒコなるべ 私訓 する
紀 記云 養の字なる

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

事を知らしめ給ふ附會せしを笑ふ
作る所の祠社天皇社より弥五郎殿社初を本社
とするものを真偽弁ぜし是より限る次第
同作をうしなひ新規を作らんとあやまり
社作る明徳八年氏の神名帳後書諸
国額多し松下氏の神名帳後書諸
不能置候事を忘或は
老たるを
一報を得る時細書す白紙をうち掛
つゝ是をかくし裏の活字と報除する表
第一あるべからざるを真偽
てもの遠見しらず
一或問筑紫北嶺山を天物慶所なるや曰三
嶽権現仏体薬師仏像拇此
ん宝神祖豊玉姫実験
実驚のし彼山の神をおがむ大僧正此霊
安楽院知雄比丘筆記せし
両あり誰のまつまを慶歟
九源山逸名

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207
ガラス使用

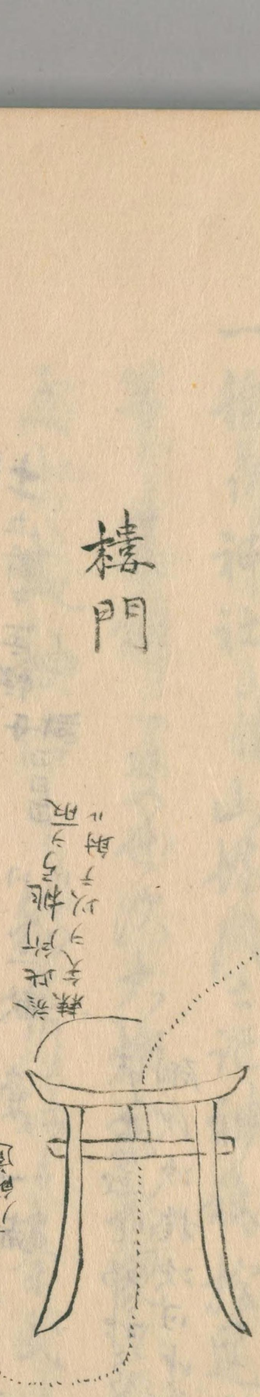
陰氣盛ますく あゆまき事多し 是屬を天物を強
一本の所多の神を忘しまつりまつりあり
一稲荷神社山椒山椒風も記神祇格建備社根之記
等一基神一変世伏大概宮稲魂と人ひろく雛なる
ことし 或秘記に 稲荷社を秦氏社遠祖とこと
山説風も記るに今ことく故也傳るなり
業中家之外遠祖仕伝屋業し稲梁を作
免ことを伝伏 秦社日秦業種あるし陶器
と多強の人求免ことく帰ることし生する故る
業祖と稲魂と別一記まや

一尾張大國霊神社五月六日の神事と梅花多多を
西月の遠離ことくるの梅に記せしは傳多の
徳多ことく彼社の祖父に学而先祖に尸供食
（カクシロ）

北 五前ロ 一献 梅子二献 鯛煮
五前ロ 玉帆 三三三
日 日 日 先粽
日 日 三献 鯛 一献 梅子二献 鯛煮

先馬場論浄衣二人楯門次に尸 奉幣二年次に尸 馬立ムカハキ
神事北面宮町ことく 威儀院門おまく於ことく

東に向ひ鳴注ぐ慶



樓門

次に參詣つゝ上馬ゝ神人より改て里人の
走馬我も〳〵と乘て參る社あるを參えさるゑ
一陸奥國くまの那智山に祈る事ありし時
すゝむとて國境を行田井あり看石の高さ下りて
この流れ淺香山を本文と高名の井あり山
の井此あるを其右の方山をへたてゝ佐藤なん白川
の關跡、雄井まであるうち遠くちけりくゑゆ二の宮
より驛此出をなをしるの墟ゑ傳るゑ

柳川あるの婦めを老まいてるまく眉毛
うる姿なし歌多此夜懸鏡とうつて關東
此そうせん奥のそうなんゑ張あり是殿枝
の神君なるとゑ主き嫁しうる娘此うく
うの芭うに麻油多く法めうる次女家ゑもを
調うく會家を營次十まてと油をもんとく

家〻する事ならへす其他稲のかけあけ九日
麦のかけあけ五日ならひ物ともく祝ひ御祭
次

一我国神事ニ射礼あり是古く里社の祭のごとく人
馬を多くあつまるをもて古風をうしなはさるとも
里なをせるもの同事なるやそこに人あつまる実ざ
る事なけれとも芸を武をみるもて徳
行をしるよしなるもて故ニ射者多し事へきく大射儀ハ
解ニ侯ハ射多人あり射ざる者もの多ニ異る事と得ハ
ざる体着遠あり射ニ

地をはらすなんどのごとあり我国ハ
一古く辻祭ハ満男をいとしハ道祖の事なるへし
昔物語延喜帝ハ満男をいとしハ道祖神五せるまとの説
宇治拾遺ハ唐帝法師のあるを記せるハ五条ハ中比まで
首途の神ニ云初ハ道祖ニ云ハ彫像ニ記五条ハ道祖ハ奉賽餅千束
ほうそうあるまて我のごとみんなく知ざるものハ
幸ハ社ニ云ハ同しく侍ニ衣冠ハ束帯男女
私ニ作りますへし清祓と伝ハ多くハ扶桑略記ハ云
うニ石ニ彫ニ道祖ハあり事ハ十ハまて海ニ
石地蔵ニ混しく四像ニ云ハ大方

地蔵ぞうさまを祀まつる寺てらであるが再建さいけんの際さいに掘ほり出だされたものである数体すうたいの仏像ぶつぞうがある

一一言ひとこと神社じんじゃ 雄略天皇ゆうりゃくてんのうの御代みよの古事記こじきの説せつの古伝承こでんしょうを記きした暦林こよみばやしと言いう書物しょもつがある

古事記こじきの説せつや伝承でんしょうに関かんする数少かずすくない書物しょもつである

字八幡大神うはちまんおおかみ 高鴨神たかかものかみ 賀茂建角身命かもたけつのみのみこと 葛城山かつらぎやまの東ひがしを言いう文献ぶんけんの国くに社しゃを建立こんりゅうなさしむ 其そ社しゃは古伝こでんを記きした暦林こよみばやしと言いう書物しょもつである

大社たいしゃなる故ゆえに古事記こじきの説せつに従したがう

大和おおやまの葛上郡かつらぎぐん葛木庄一言ひとこと神社じんじゃを或あるは誉田ほんだの御宇ごうの役えきの小角おづぬ神かみを祀まつるの説せつに従したがい

鹿島神かしまのかみ 経津主神ふつぬしのかみ を祀まつるの説せつに従したがう

一戸人家いちこじんかの我わがおおやしろ 神社じんじゃと称しょうするものは

もろさしの一廓いっかくの制せいにもれし非礼ひれいの行事ぎょうじまた昔むかしの一廓いっかくの制せいにもれし非礼ひれいの行事ぎょうじまた昔むかしの

昔むかし姓祖せいそ の神かみ となのる氏うじ 祀まつる家いえ別べつ家け も多おおし 未詳みしょうの場ばあい

と地祇ちぎ の場ばあい 近年きんねん往往おうおうにして転宅てんたくをもって

氏神うじがみ の社やしろ と言いうものは是これ全まったく私わたくし非礼ひれいであ

ります

大和國平群郡平群坐紀氏神社
名を未だ詳かにせず本二廓より成り紀の宗家我の祀る
事次

伴緒國負名部郡平郡郷の神社
是國神と稱するも多くは平群宿禰と後世混淆の
記味淺の首文雄勝ち下に未だ詳かにせず彼も貫地名上祖
姓を稱し伊勢國一志郡にも多く勅使を遣して私
社神をまつる比類諸國にて紀氏の祖神と遷して他の神と曜
實に非禮私事にも似たり

一中臣祓は何コトヒシイハネノチ等は諸家の
解多く梅雨の日記にて三韓出事とするを
天地剖判の代草木言語の時に對する事なり
我日本出事なりと説くすべて名高
此解を大祓や元鴻荒出時の記を編序實
昧出狀と我出俗出祓にて岩根木立を言問し
昔ようしさまで支那さまで説くは非なり

日本紀出文を十九卷藤家々の言へ
天孫出書にこの帝文出事と申し仲世業

の制をもつて法り修之し
内裏の殿堂をもつて聊爾又普
普此時もあらしまゝ日本紀にいふ小墾田の宮
闕と造記し尾張の世人事を擬し
んそうそう

一神宮雑剣集曰大神宮四至東西深山無有
人宅北限宇治川者其程去宮一里余此内
不住人宅禁制九嚴此則爲禦織事也云々
つゝ宮法格此内ゟ良比殺造まく不せき
制ゟもちひ侍るなり

所もまきちらくに人の行来多きを神路
山の嵩きおもくるゆゑなり

853
207

3536

唾噦雜史 卷之六

国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『[ブン]唾雑史 8巻』 請求記号 853-207